

改めて「靖国神社」を考えませんか？

◆二月十一日。この日は、戦前・戦中には「紀元節」と呼ばれ、初代天皇と考えられた「神武（じんむ）天皇」が即位したことを祝い、その子孫（天皇）による統治は永遠であると教えてきた天皇制出発の原点です。

◆その根拠の「日本書紀」には、「辛酉（かのとり）年春正月一日（元旦）即位」と記されていますが、明治政府は、その日を太陽暦に換算して「紀元前六六〇年二月十一日」と決めました（一八七三年＝明治六年）。

・しかし、紀元前六六〇年頃の日本は、縄文時代。文字や暦は勿論のこと、階級もなく、ましてや天皇もない時。つまり天皇制は、まったくの「架空」から出発したのです。いわば「歴史の偽造」と言うべきでしょう。

◆しかし明治政府は、一八八九（明治二二）年二月十一日に「大日本帝国 憲法」を發布し、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス（一章第三条）」と定め、国家とある宗教を一体とし、「天皇・現人神（あらひとがみ）」を崇めさせ、「靖国神社」を最大に利用し、「靖国で会おう」という美名的迷言をもつて、全国民を侵略戦争に駆り立て、アジア諸国を侵略していったのです。

◆それ故に、敗戦四ヶ月後の十二月十五日、政府は、それらの過ちから、「神道指令（国家神道廃止）」を出し、国家と宗教（特に靖国神社）との関係を断ち切り、天皇は人間であることをも内外に知らしめたのです。

◆しかし戦後、「二月十一日」は様々な形で顔を出し、ついには一九六七年に「建国記念の日」と政令で定められ、賛否両論の中で現在に至っています。

◆昨年十二月二十六日、安倍首相は、突然に靖国神社参拝を強行しました。その後の新聞報道によりますと、周囲には知らせず、菅官房長官をはじめ、事前に相談した側近らの強い反対を押し切ったとのこと。

・そして案の定、予想以上の海外からの批判を受け、特にアメリカからは「失望感」を示され、中国・韓国とは、以前よりも数段、冷たい関係に陥りました。

◆このような中、改めて「靖国神社の経緯を学び直し、安倍首相の危険な姿勢」を問い、それらにどう対処すればよいかを共に考えたいと願っています。ぜひご参加ください！

日時 二月十一日（火）開場一時半・午後二時開会～午後四時閉会

場所 浜松市 地域情報センター（東田町）

講演 「今、改めて靖国を問う・・・安倍首相の、靖国神社参拝を巡って」

講師 小林 眞氏（遠州教会牧師）

*この集会は、二〇団体の共催にて開催（連絡先 浜松市中区紺屋町301）

15 小林

二〇一四年二月九日（日）第五六四回・憲法を守る平和行進

浜松市憲法を守る会（事務局 浜松市紺屋町301）